

〔2〕生活単元学習による実践

(1) 取り組みについて

生活単元学習は、生徒が身近な生活の中でより明確に目的意識を持ち、具体的な活動を通して意欲的に取り組むことのできる学習形態である。「生活を楽しむ」の視点でとらえると、生徒一人ひとりの思考や行動のペースを大切に、自らが主体的に活動に取り組めるように柔軟に対応できる形態であると言える。そして、その反省や成果は、身近な生活に返して生きた力とすることが可能である。一時間の学習を大切に扱い、充実して楽しむことのできる授業づくりと、将来を見通して個に応じた基本的な技術の習得や態度の育成をねらった授業づくり（授業が楽しいとともに基礎基本が着実に積み上げられていく場である）をめざして実践を積み上げた。

<生活単元学習における授業づくり>～場の設定、集団の内容、人との関わり～

生徒自身の行動や思考のペースを大切に、自らが主体的に活動に取り組んで自分なりに反省して、次への意欲やバネにしようとするような題材を選ぶ。

① 昨年度の実践

前年度の取り組みを基にして同じ単元で、本研究のテーマに向けて切り込んだ。

《キャンプ》

◎題材選定のポイント：失敗を恐れず、できるだけ「自分たちの力で」考えて、主体的に友達と一緒に活動できる活動内容を選んだ。

◎主 な 題 材：話し合い、場所の確認、炊飯練習、出し物練習

《校外学習・修学旅行→報告会》

◎題材選定のポイント：3年は体験地域の拡大、自主性協調性を図りながら旅行の楽しみを知る機会。1・2年は新しい経験や楽しみを拡げるために、また、何にでも挑戦する気持ちを育てるために、学年ごとに活動内容を決めた。

◎主 な 題 材：見学先を知る・決める(パンフレット等)、スケジュール・しおり作り、紙漉き、プラネタリウム、農家の仕事について知る、梨の袋かけ（→9月梨狩り）、報告会（楽しさ、おもしろさを知らせる）広島・山口

《大山宿泊学習》

◎題材選定のポイント：班独自で工夫した班活動と、全員で取り組んだ全体活動の2つを柱にして活動内容を選んだ。

◎主 な 題 材：話し合い、地図作り（コース決め、お地藏さん巡り・穴場巡り・俳句作り）、食堂の利用、出し物練習、大山登山

《学習発表会》「おーい、中学部」「創作リズム打ち・傘踊り」

◎題材選定のポイント：楽しさをみんなに知らせようと、校外学習・修学旅行を題材にして劇化した。既成のリズムではなく、創作リズム打ちを取り入れた。

◎主 な 題 材：劇作り、太鼓のリズム作り

《お楽しみ会》「ザ・中学部忘年会」

◎題材選定のポイント：生徒の主体的活動をねらい、実行委員会形式を取った。一人一役で会の運営に責任を持って関わったり、特技を披露して会の楽しみ方を膨らませたりする方法を教えるという点を重視して題材を選んだ。

◎主 な 題 材：実行委員募集、実行委員会結成、先生達の特技、仲間づくり、秘密練習、係の仕事、交流

《ふれあい広場》

◎題材選定のポイント：人に楽しんでもらうことを意識して催し等を工夫したり、準備や製作の過程を自分が楽しんだりできるように「楽しいこと」を意図的に教え、楽しみが実現するよう、出来る限り本物を経験させられる題材を選んだ。

◎主 な 題 材：売るコーナー、作るコーナー、遊びコーナー、喫茶コーナー、現地見学、アドバイス会

～実践を終えて～

題材を工夫したり新しく取り入れたりした単元は、大山宿泊学習、学習発表会、お楽しみ会、ふれあい広場である。大山宿泊学習では、大山という山そのもののすばらしさを味わわせたいと考え、大山登山に挑戦した。初めて登山を経験した生徒が多く、登頂した時は大喜びであった。時間の関係で途中で下山せざるを得なかった生徒は、残念がった。生徒個々の実態に応じて登山を実施するには、1泊2日を2泊3日にして登山にゆったりと時間を取る必要を感じた。学習発表会の「太鼓・傘踊り」では、例年行っていた既成のリズムではなく、自分たちで考えたリズムを打とうと取り組んだ。創作するおもしろさ、それを演じる楽しさを味わわせた。

「お楽しみ会」では、実行委員会形式を取り、出し物を“自分の特技”として各々が披露し、できるだけ「自分たちで」取り組ませるように意識させた。“特技”のとらえ方が難しかったが、自分なりに考えて、練習し発表したことに満足していた。ふれあい広場では、やりたいことを同じくする仲間一同好の志が集まって楽しんでもらえる催しを工夫した。催しに参加する楽しさとともに企画するおもしろさも味わわせるには、実際場面での体験を積み上げる必要がある。



大山宿泊でおじぞうさんに
前かけをかけた「今年も来たよ」

② 本年度の実践

昨年度の取り組みを基にして、単元の配置や構成を見直し、単元設定の理由を明確にして取り組んだ。

《校内宿泊学習》

◎題材選定のポイント：1・2年は学級づくりを基盤に、基本的な生活習慣の定着を図る場面を大切にしながら、生徒たちが普段目にしていない学校の周り（湖山地区）を題材とした校外学習を計画した。3年は修学旅行の事前指導として、交通機関や公共施設の利用などを取り入れて題材を選んだ。

◎主 題 材：基本的な生活習慣、集団行動の約束、買い物、調理（夕食、朝食、弁当作り）、鳥取空港見学、鳥取大学探検、因幡万葉の里

《野外炊飯》「学部遠足」

◎題材選定のポイント：教育実習生と一緒に、楽しい思い出になるような炊飯メニューを考えた。思い出づくり、お別れ会の意味を含め、教育実習生と生徒の主体性に任せた。

◎主 題 材：買い物、準備、調理（焼き肉、イカめし、中2プリン、パーベキュー）

《校外学習・修学旅行→報告会》

◎題材選定のポイント：3年は体験地域の拡大、自主性協調性を図りながら旅行の楽しみを知る機会とし、1・2年は新しい経験や楽しみを拡げるために何にでも挑戦する気持ちを込めて題材を選んだ。

◎主 題 材：見学先を知る・決める（パンフレット等）、スケジュール・しおり作り
交通機関の利用、燕趙園、鳥取砂丘、温泉、先生の家、広島、報告会（楽しさ、おもしろさを知らせる）

《大山宿泊学習》

◎題材選定のポイント：大山登山にゆったりと時間をあてようと、本年度は2泊3日で取り組んだ。経験のある2、3年生のリードで主体的に活動できる大山寺周辺、「登るぞ」の思いを持って挑戦する大山登山、初めて行く境港市というようにそれぞれの場所や内容に明確なめあてを持たせて題材を選んだ。

◎主 題 材：話し合い、地図作り（大山寺、境港市、鳥取県）、コース決め、しおり作り、大山登山、1万トン岸壁、海とくらしの資料館、水木しげるロード

《学習発表会》「創作劇・オズの魔法使い」「創作リズム打ち・傘踊り」

◎題材選定のポイント：歌やダンスの好きな生徒が多いので、その内容を生かされるミュージカルを題材として選んだ。自分のやりたい役を選んで劇作りのおもしろさを味わわせる。太鼓を打つこと、創作を楽しむ→創作リズム打ち(全体・クラス)

◎主 な 題 材：劇作り(大道具、小道具、衣装、台詞、音響効果等)太鼓のリズム作り、鳥養の学習発表会鑑賞

《お楽しみ会》「ガッツだ！いけ忘年会」

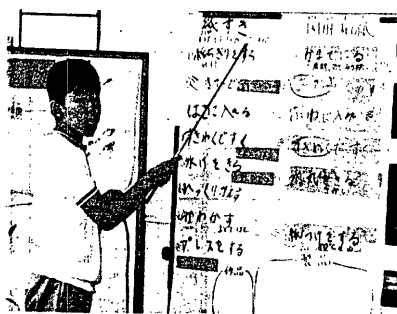
◎題材選定のポイント：一人ひとりが自分の個性を生かして会の運営に喜んで貢献できるように、「持ち寄りパーティ」式で行うことにした。意見の取りまとめや企画運営の母体は実行委員会。教師は、実行委員の一人になったり、一緒に準備をしたりして仲間として活動することを楽しむ。生徒に身近な題材を選んだ。

◎主 な 題 材：実行委員募集、実行委員会結成、やりたいことグループ(特技、料理、ゲーム、会場セッティング)、当日の係の仕事、交流

～実践を終えて～

校内宿泊学習、野外炊飯の単元で、テーマに切り込む視点に目を向けた題材の工夫を行った。校内宿泊学習は、基本的な生活習慣の定着や確立をねらうと共に、学級の仲間と校外学習日程や内容に自分たちの思いを入れて計画する機会にした。1年生は、先生にやり方を教えてもらいながら、2年生は経験を生かして、3年生は2年間の積み上げを発揮して・・・と学年に応じてめあてを持った。本年度は校内宿泊学習にも切り込み、また、大山宿泊学習を2泊3日で実施する等の流れにより、行事の精選及び見直しを行った結果、キャンプを取りやめて野外炊飯に変更した。野外炊飯は、実習生とのお別れ会の意味も含めて目的を明確にし、生徒と実習生が協力して主体的に取り組むように促した。

また、学習発表会では創作劇に取り組み、劇作りを試みた。原作を基にして、自分がしたい役を選び、台詞や衣装等を工夫をした。お楽しみ会では、アンケートを基に「やりたいことグループ」を作って、持ち寄りパーティ式に取り組む実践を試みた。できるだけ生徒の思いを大切に、自分の事だと意識させながら意欲を持って主体的に活動できるように題材の選定や開発を行った。あらゆる場面や機会をとらえて試行錯誤をした一年であった。来年度は、行事の精選と単元の配置及びねらいの明確化を考慮して、題材の精選を行い、より研究テーマに迫る実践を積み上げ成果をまとめたい。



校外学習～報告会～



銀行で初めての貯金



わらべ館でお弁当

表-9 平成7年度 生活単元学習年間題材配列表
(※作業実習も含む)

	1 年	2 年	3 年	学級生活
4	・新しい生活	・新しい学級 ・1年生を迎える会	・新しい学級	<ul style="list-style-type: none"> ・性教育 (体の学習) ・同和教育 (心の学習) ・物作り ・読書 ・奉仕活動 ・調理実習 等 <p>◎学級毎に 年間を通 して計画</p> <p>※の作業実習 は、前後指導 も含む</p>
	・校内宿泊学習	・校内宿泊学習	※校内作業実習	
5	・キ ャ ン プ (賀露公民館近くの松林)			
6	↓			
	・校外学習 ↓ (報告会)	・校外学習 ↓ (報告会)	・修学旅行 ↓ (報告会)	
7	※校内作業実習	※校内作業実習		
	・1学期のまとめ	・1学期のまとめ	・1学期のまとめ	
9	・2学期に向けて	・2学期に向けて	・2学期に向けて	
	・運 動 会 ・連 合 運 動 会			
10	・大 山 宿 泊 学 習 ↓			
11	・学 習 発 表 会 ↓			
	※現場実習 (中教振)			
12	※ 校 外 作 業 実 習			
	・お 楽 し み 会 「ザ・中学部忘年会」			
1	・2学期のまとめ	・2学期のまとめ	・2学期のまとめ	
	・3学期に向けて	・3学期に向けて	・3学期に向けて	
2	・ふ れ あ い 広 場 ・文 集 作 り ↓ ↓			
	・もうすぐ卒業 ↓ ↓ (卒業式)			
3	・3年生を送る会			
	・もうすぐ進級	・もうすぐ進級		

表-10 平成8年度 生活単元学習年間題材配列表

(※作業実習も含む)

	1 年	2 年	3 年	学級生活
4	・新しい生活	・新しい学級	・新しい学級	・性教育 (体の学習)
	・1年生を迎える会			
※ 校 内 作 業 実 習				
5	・家族の仕事	・家族の仕事	・家族の仕事	・同和教育 (心の学習)
	・校内宿泊学習 ↓	・校内宿泊学習 ↓	・修学旅行 ↓	
6	・野外炊飯(学部遠足)	・野外炊飯(学部遠足)	(野外炊飯~学部遠足)	・物作り
	・校外学習 ↓	・校外学習 ↓	(校内宿泊学習) (校外学習)	
7	(報告会)	(報告会)	(報告会)	・読書 ・奉仕活動 ・調理実習 等
	・1学期のまとめ	・1学期のまとめ	・1学期のまとめ	
9	・2学期に向けて	・2学期に向けて	・2学期に向けて	◎学級毎に 年間を通 して計画
	・秋季運動会		・連合運動会	
10	・大山宿泊学習 ↓			※の作業実習 は、前後指導 も含む
	・学習発表会 ↓			
11	※校外作業実習 ※現場実習(中教振)			
	・お楽しみ会 ↓			
12	・2学期のまとめ	・2学期のまとめ	・2学期のまとめ	
	・3学期に向けて	・3学期に向けて	・3学期に向けて	
1	・ふれあい広場(仮称)			
	・文集作り ↓			
2	↓			
	・もうすぐ卒業 ↓			
3	・3年生を送る会		↓	
	・もうすぐ進級	・もうすぐ進級	(卒業式)	

(2) 研究単元実践事例

① 校内宿泊学習（2年生の実践）

《単元設定の理由》

○家庭を離れ、学級の友達や先生と寝食を共にしながら過ごす校内宿泊学習は、一人ひとりの身辺自立の力をつけるのによい機会である。社会的自立をめざし少しでも主体的な生活を送るためには、基本的な生活習慣が確立していることが必要である。新学期が始まったこの時期に、自分一人で身辺処理をしたり日程に従って活動したりして、自分自身の課題に気づく、という目的を持って校内宿泊学習に取り組むことは意義深い。

新学年になって1か月、2年生にも徐々に上級生としての自覚が見られ始めた。仲間と協力して自分達の生活づくりをしていく校内宿泊学習は、学級の一員であるという自覚を高めるとともに、主体的に生活を楽しもうとする意識を育てる。学習内容を生徒が自ら考え、計画、実践し、反省するという一連の学習活動を生徒に責任を持たせて行うことのできる学習である。失敗を恐れず「やってみよう」とする前向きな態度で、苦しいことも楽しいことも共にやり遂げさせ、2日間の校内宿泊学習を真に楽しませたい。このことが6月の校外学習や10月の大山宿泊学習などへの意欲づけになるからである。

○一年間学校生活をともに送り、生徒たちにはお互いに刺激しあい協力しあう仲間意識が芽生えて、何でも一緒にやろうとする様子が見られ出した。

一人ひとりの個性が学級の中で存在感を持つ。日々口やかましくみんなに指示するが、よい思いつきや考えを提示して実践しようとするT男。話言葉ではうまく表現できないが、人の動きや表情を見てさっと行動に移せるR男。のんびりとしていて行動は遅いが、話はよく聞いていて行事をとても楽しみにしているT子。経験が少なく自信がない反面、一度経験すると確実に真面目なH男。友達や教師の手助けは必要だが、できるだけ友達と同じことをしようとするY男。自制が利かず自分勝手な行動が多いが、発想が豊かなG男。

6名が互いに個性を認め合いながら豊かな関わりを持ち、学級はいつも明るくにぎやかである。お互いに注意し合ってもめることもあるが、自分たちにまかされた仕事は、協力しあって張り切ってやろうとする。

○実践にあたっては、それぞれの基本的な生活習慣の動作・行動が確実にできるとともに、日程表に従ってできるだけ自主的に行動に移ることができることを大切にしたい。そのためには、声かけや細かい指導をして個別に対応していきたい。学習活動では、時間や生活の流れは指導者が提示するが、学習の内容や約束は自分たちで決める。昨年の学習や生活経験を手掛かりにして、話し合いはできるだけ生徒に任せ、指導者は生徒のつぶやきを聞き逃さないようにしたり、思いを引き出すような効果的な声かけを工夫したりして、仲間として学習に参加する。日程表に従って主体的に宿泊学習に取り組ませたいので、学習内容や計画は無理のないものにしたい。自分たちで作ったという満足感が得られるように、指導者は、仲間・アドバイザーとして学習を盛り上げる。自信を持たせるために、活動場所は身近な湖山周辺と限定する。各活動の中に自分たちの思いが入っているという手ごたえを感じさせ、それを実現させるおもしろさを味わわせる。こう言った思いで学習活動を進め、生徒が生活を楽しむ場を設定するよう配慮しながら、支援をすることにした。

実践事例 [大学探検] ～自分たちが作った計画にできるだけ沿って～

a 実践の概要

湖山周辺の見学したい場所として①青島へのサイクリング②鳥取空港③鳥取大学前駅④鳥取大学があがった。話し合いの結果、鳥取大学に行くことに決定した。その理由は、①自転車に乗れない人がいるので、練習してからにする ②昨年に行った ③汽車に乗る学習の時に行く ④鳥取大学は自分たちの学校に関係のある大学である。校長先生がおられる。実習の先生たちが勉強している。通学バスからも見える。昨年の2年生も行っている・・・ということである。

生徒が主体的に活動に参加できるように、みんなで何かを決定する時は、必ず理由を確認して納得するようにしている。この時期ちょうど教育実習が始まり、生徒は実習生と一緒に大学に探検に行くことをとても喜んだ。大学の建物しか見たことのない生徒は実習生の話を聞いてイメージを膨らませ、期待を持って自分たちの見学したい場所を決めた。実習生のアドバイスを受けて地図にコースを書き込むと、大学への興味は増していった。

b 展開の様子

《探検コース》できるだけ自分たちの力で地図に従って探検…困ったら相談したり人に聞いたりしよう

場 所	生 徒 の 様 子
◎教育学部 見学	校長・校医の先生等知った先生の研究室を見つけるとうれしそうにした。実習生が知っている先生に、思いがけずおもちゃ作りの話を聞くことができた。
◎他学部・ 図書館	実習生にも工学部の玄関が分からず、地図を広げて通りがかった学生にT男が聞いた。T男が勝手にどんどんリードしてしまうので、H男は「僕が学級委員なのに」とむくれていた。T男にはみんなと相談するように声かけをした。
◎食堂で 昼食	食券の買い方、待ち方、片付けの仕方等、人の様子を見たり教えてもらったりして真似をした。
◎農場・ 農園	家畜や畑、藤棚等を見て、のんびりと散歩や草花摘みを楽しんだ。
◎生協で 買い物	各自の課題に応じて買い物をした。「尚徳の森」で食べるため、ジュース等、一人が1つおやつも買った。
◎尚徳の森	買ったおやつをさっさと食べて遊具で遊ぶG男、友達がいる所に寄って行くR男、いつまでも教員の側を離れないT男など、楽しみ方も様ざまだった。



大学にて～地図を広げて～

c 実践を終えて

初めて見学する場所なので、みんなが期待と興味津々の気持ちで一杯だった。「一緒に」を合言葉のようにして自分勝手に行動しようとする友達を制したり、友達の様子を見守ったり待ったりして学級としてまとまって行動しようとする姿も見られた。「尚徳の森」での遊び時間が少なかったが、ほぼ計画に従って探検できたことは、自分たちの計画したことに対する自信とたくさん歩いてえらかったけど、楽しかったという満足感を持たせた。

② 野外炊飯(「学部遠足」～青島ハイキング)(2年生の実践)

《単元設定の理由》

○例年教育実習が始まってすぐに行っていた「学部遠足」を、本年度は実習の終わりに野外炊飯として行うことにした。遠足をして仲よくなろうと意識づけるよりも、日々の学習を通してお互いによく知り合い、「思い出に残る楽しい遠足にしよう」と意欲と期待をもって取り組む方が、生徒たちがより主体的に活動し、相手を意識した行動や楽しみ方を経験できるのではないかと考えたからである。気候のよいこの時期に、親しみを増した実習生と野外炊飯をすることは、生徒たちにとっては心楽しい活動である。メニューは、今までに経験したことのないものに挑戦することで、「やってみたい」という意欲を高めたい。

青島までのハイキングでは、友だちや実習生と一緒に景色を見たり、話をしたり、また、交通安全にも気を配りながら野外炊飯に必要な荷物を背負って約5 km歩く。青島に着いた時の喜びは格別であろう。それから学級毎に野外炊飯の準備に入る。自分の仕事に責任を持ち、協力してできあがりを楽しみに待つというこの活動は、生徒が主体的に楽しんで学習できるものである。

○2年生は、昨年のキャンプの野外炊飯で焼きそばを経験している。「キャンプといえばカレーライス、焼きそば」と作ったことのある物しか言えなかったり、以前に食べたことのある「トンカツ」など場にそぐわないものを答えたりして、拡がりがない。T男、H男は特にこの傾向がある。R男、T子は経験や好みを基に多少発展させて考えることができる。G男は学校以外で情報を得たり、他の学級の様子を見たりして意見を言うことができる。Y男は写真や思い出話によって、自分のしたことを思い出すことができる。このようにさまざまな発達段階にある生徒たちだが、学級としての話し合いも徐々にできるようになってきた。しかし、パターン化した自分の意見に固執してしまう生徒が多いので、話し合いでは「なぜそれがいいのか」等、理由をできるだけ発表させて、みんなが納得した上で決定するようにしている。調理活動については、やり方を正しく教えて手本を見せれば、失敗しながらでも一人で作業ができる生徒が多い。

○指導にあたっては、昨年までの経験を大切に生徒の思いを引き出すのが、活動に拡がりを持たせるため、実習生も意見を言い、生徒が経験したことのないメニュー(イカメシ、プリン)を提示したい。「何それ?」という生徒たちの素朴な質問に答えるためにイカメシ博士を登場させ、話を聞いたり試食をしたりしてイカメシに興味を持たせたい。また、冷蔵庫のない所でどのようにしてプリンを作るのかについても教え、工夫すれば野外炊飯でもいろいろな物が作れるということに気づかせたい。初めて作るメニューなので、練習ではどの調理活動も全員に経験させて、その後で自分のやりたい仕事を選ばせたい。練習で材料や道具などの必要なものが具体的に分かるので、本番に向けての買い物や道具の準備は生徒を中心に行い、分からない時や困った時は、実習生に相談するようにして、できるだけ生徒自らの活動として責任を持ってやらせたい。新しいことに挑戦する期待と不安を持ちながら、練習で見通しと楽しみを持って本番に臨み、責任を持って自分の役割を果たすことで成就感や満足感を味わわせたい。また、生徒が将来の生活を楽しむためにも、この活動はとても価値のあるものになると期待したい。

実践事例 「買い物、イカメシ・中2プリン」 ～自分の仕事に責任を持って～

a 実践の概要

学習の柱を3本立て、実習生(支援者)の立場を明確にしなが、次のように取り組んだ。

①メニュー決め～実習生は、自分の意見を進んで発表する生徒の一人、仲間～

イカメシはG男だけが食べた経験があり、イカメシに賛成した。他の生徒はイメージがわからないので「イカメシ博士」に教えてもらうことになった。プリンは、特大でフルーツたっぷりの中2プリンを作ることに決まり、T子はできあがりの絵を描いた。

②調理練習～実習生は、技能伝達をする指導者、お手本～

手順表、材料、道具はすべて実習生が準備し、「初めてだから教えるけど、本番は自分たちです」ことを確認した。

③買い物～生徒一人ひとりが課題解決するための支援者～

前単元・校内宿泊学習の課題を解決することを基本にした。

〈例1〉発音が不明瞭でやりとりは苦手だが、スーパーでの買い物

はできるR男《メモを持って米屋に行き、「ごめんください」と言って、もち米800gを買う→困ったらメモを見せる》

〈例2〉商品名が異なるだけでオロオロして、応用がきかないH男

《品物のパッケージを持って、同じ物を探す。見つからない時は似ている物を買う》

〈例3〉いつも教師と一緒に品物を探すY男《バナナの絵が描いてあるメモを持ち、「買う物はバナナ」とつぶやいて練習し、店内では一人で探す。できれば一人で買う》



買ったよ！もち米

b 展開の様子（野外炊飯当日）

炊飯場に着くと早速手順表を木にぶら下げて、それを見て確認しながら自分の仕事を進めた。お茶作りと火の番のR男とH男は、火がなかなかつかなくて困っていたが、実習生



できた！中2プリン

のアドバイスを受けて火がつくと、勢いづいてたきつけていた。T男とG男は、段取りよくイカメシを作った。作業の途中にうろうろしがちなG男が、最後まで丁寧にもち米をイカにつめた。のんびりとマイペース型のT子とY男は、2人だけのペースをじっくり守ってプリン作りをした。日頃は他の生徒が手助けをしてしまうことが多いのだが、今回は役割分担をはっきりとさせ、自分の仕事に責任を持つ事を意識づけたのが効果的だった。

c 実践を終えて

買い物は、前単元と引き続いた課題に取り組めてよかった。調理練習は、全行程を全員が経験したので時間がかかり、生徒の活動が持続しなかった。しかし、取り組みの意欲はとて高く、結果的には自分のやりたい仕事を主体的に自分で選ぶことができた。当日は練習の成果があって、段取りよく取り組めた。自分たちの料理が出来上がるのを楽しみにしてじっと待ち、出来上がった時はみんなが喜びを共有したという手応えを感じた。(田村)

③ 修学旅行（3年）

〈単元設定の理由〉

○修学旅行 —— それは、生徒ならば必ず行ってみたいという夢、大人ならば遠い学生時代の郷愁ではないだろうか。それほど、この「修学旅行」は、人々にとって学校時代の大きな思い出の1つになるものである。本校の中学部では、例年3年生が実施しており、本年度も6月25日～27日の2泊3日の予定で広島方面を計画している。学部の最終学年で行く意義として、修学旅行は中学部での全ての学習の集大成であり、今まで積み上げてきた学習を生かす良い機会である。学校や家庭という枠から出て、乗り物に乗る、宿泊施設に泊まる、食堂を利用する、おみやげを買う、施設や工場を見学するなど、多くの経験ができ、未知の人とのコミュニケーションを図ることもできる。さらに、お金の計算、字の読み書きなど、それまでに積み上げてきた課題に実地に取り組める単元でもある。また、社会生活に必要なルールやマナーを学ぶ良い機会でもあり、将来、生徒が旅行する場合の素地ともなる単元である。

○本学級の生徒は、小学部あるいは小学校のときの修学旅行経験者が3名、未経験者が1名である。また、小さいころ家族で広島に行った生徒が1名いる。生徒の行動範囲はあまり広くなく、ほとんどが学校と家庭との往復で、休日に親子で出かける場はそう多くない。そのため、どうしても接触する人は限られ、ふだん私たちが社会生活をする上で必要な、乗り物に乗る、買い物をする、食堂を利用する、初対面の人とでも話をするというような経験が乏しい。学級の中では、仲間意識もありお互いのこともよく知っているが、学級一丸となつての行動は少ない。本学級の生徒は、3年生になったら修学旅行に行くんだという気持ちをみんなが持っていて、進級間もないころから大変楽しみにしている。広島という言葉に敏感に反応したり、どんな服装で行くのか、どんな物を持って行くのか、誰と一緒に泊まるのかなどを話すなど、心待ちにしている様子が伺える。

○この単元を指導するにあたっては、早く修学旅行に行きたいという気持ちや期待をどの生徒にも持たせ、高めるような授業を進めて行きたい。そのために、生徒自身が活動できる場や時間を多く準備し、指示されて動くのではなく、自らの思いで実践できる授業の組み立てをすることが大切である。そして、一度も行ったことのない場所や未経験の乗り物などについては、あらかじめ準備した写真、ビデオ、パンフレットなどの資料を有効に利用するなど、未知への不安感を取り除いて、修学旅行に対する夢や希望を膨らませていきたい。平和学習については、絵本や写真を利用して戦争の事実を知らせるとともに、今わたしたちにできることは何なのかを話し合わせ、千羽鶴や平和のメッセージなど形にして実践できることに取り組ませたい。また、戦争に対する思いは、生徒自身が感じたことをそのまま認め、つぶやきを大事にしたい。そして、事前に校内宿泊学習を行い、生活面や安全面での様子を見て、できなかった項目の中から努力したらできそうなものを修学旅行のめあてとし、見通しと目標を十分もって学習を進めたい。この単元が、ともすると生活範囲が狭く、限られた空間の中での活動に終わりがちな生徒にとって、少しでも多くの経験ができ、将来の生活を楽しむことへつながることができればと願っている。

実践事例 [広島ウオッチング]

a 実践の概要

広島は生徒にとって未知の場所であり、広島について知っていることは、ほとんどない。幼い時に家族と一緒にいったことのあるS男は、そのときのことをあまり覚えていなかったが、母親が宮島で鹿と一緒に撮った写真を持たせてくれた。また、生活ノートには、生徒の修学旅行を楽しみにしている家庭での様子を書いてくださる保護者も多く、保護者の修学旅行に対する期待も大きかった。授業では旅行の見通しを持たせるために、日程から取り組んだ。そして、移動に使う乗り物についてビデオやパンフレットを調べ、自分たちで作った日程表の中に乗り物の名前や絵を書き込んでいった。見学先は分担して、パンフレットや絵はがき、本等から調べ、広島の名物や特産品を教師や教育実習生の話から聞き出し、発表し合った。そして、宮島のしゃもじを一昨年引率した教師から借りて、教室の前に飾っておき、意欲づけの1つとした。

b 展開の様子

生徒名	教師の意図・支援	生徒の様子
S男	乗り物に興味があるので、乗り物の名前を確認しながら乗った。	特に新幹線に興味を持ち、プラットフォームに入ってくる様子をうれしそうに見ていた。
H子	宮島水族館で魚の名前や体の色の美しさ、形のおもしろさを見るように声かけした。	見る物すべてに歓声を上げ、じっくりと見入っていた。売店でミニ水族館のおもちゃを買った。
S子	平和記念資料館に展示されている資料を、学習したことと結び付けながら見るよう声かけした。	事前の平和学習でも戦争を怒っていたが、ここでも戦争の恐ろしさをつぶやいていた。
K男	みんなと一緒に行動できるよう、S男と二人組を組ませた。	S男のする通りまねをし、一緒に行動することができた。

c 実践を終えて

修学旅行は楽しく旅行するだけでなく、実社会の空気を肌で感じるという利点がある。学校や家庭では体験できないことを、2泊3日の間にたくさん体験したのではないだろうか。その体験を通して満足感、成就感を味わわせるには、一つ一つの行いに時間を与え、待つという姿勢を取ることだと考えた。そのために日程はゆったりととり、無理な行程を避けたのは生徒の実態に合っていてよかった。そして、未知の場所について十分な調べや準備を自らの手で行ったことも大きな自信となった。自分の力でできたという自信と、自分の手で調べたことが実際に目で見て体験できたことは、中学部時代の思い出になるとともに、将来進んで物事に挑戦しようとする力になると信じている。(高木)



原爆ドームの前にて

④ 大山宿泊学習（合同－縦割り）

〈単元設定の理由〉

○1学期は校内宿泊学習・校外学習（修学旅行）など主に学級を中心に活動してきたが、本単元では、学級を解いた合同および縦割り班で取り組んでいくことにより、学年を越えた人間関係の拡がりやリーダー性の育成、生徒一人ひとりに応じた経験の積み重ねなどをねらいとして、個々の楽しむ姿を育てていく。また、日頃行く機会の少ない鳥取県西部の様子や鳥取県の概要について学習した上で、関心を深めるとともに、実際に見学していく。大山寺周辺・裏大山・境港などの見学先では、さまざまな人と接する経験も持てる。班活動では、各班で自主的に取り組ませることにより、興味・関心を持続させ、自分たちの意見を反映した学習を積み上げていくことが可能である。

大山は中国地方第一の秀峰であり、登山・紅葉・スキーなどで有名で、県内の中学校では大山登山を計画している学校も多い。本校の生徒も同年齢の生徒と同じように大山周辺を散策したり、登山に挑戦したりして、登山をする満足感、成功感を味わわせたいと考える。このような活動の中で喜びや楽しみを持ちながら、自分なりにめあてを持って意欲的に取り組むことができる単元であると考え、本単元を設定した。

○縦割り班は、赤・黄・緑のグループに分かれ、運動面をもとに人間関係、リーダー性などを考慮して編成しており、1学期から体育、学校全体の活動（児生集会、運動会等）などで活動している。生徒は、大山寺や境港での班活動や大山登山を楽しみにしており、1年生も、班の友だちの話や写真やしおりなどを手がかりに、初めての大山宿泊に期待を膨らませている。登山については、1年生は経験がないが、大山に「登るぞ」とやる気満々である。視力の弱い生徒や、心臓疾患の生徒などもおり、登山には、個別の配慮が必要である。

○指導にあたっては、どの班にも共通して鳥取県の地理や大山寺などの見学先についての学習、買い物と外食についての学習を行わせたいと考え、全体に関わる鳥取県地図・境港の地図・宿泊学習のしおりを、各班で分担し、責任を持って作成していくようにした。

各班での取り組みの中では、コースや活動内容を自分たちで計画し、実行していく喜びや、おみやげを買ったり、食堂で昼食を食べたりする楽しみなどを膨らましながら進めていく。また、主体的に取り組めるように、個に応じて、写真・パンフレット・地図・日程表などの教材・教具を工夫して提示したり、調べ活動を取り入れたりしていく。

大山登山については、2・3年生は去年の経験を思い出させ、去年の様子を発表したり、「大山の頂上に登るぞ」というめあてを設定し、登山への気持ちを盛り上げたい。1年生は久松山に登ることで登山に対するイメージを持たせ、大山登山へとつなげたい。

さらに学習の経過や予定を掲示することにより、単元や1単位時間ごとのめあてを意識しながら活動させ、学習に対する見通しや意欲をつないでいきたい。学習の様子や話題は、学校だけではなく、学級通信・生活ノート等で家庭にも伝え、家庭の協力を得ながら、意欲をさらに高めていきたい。

実践事例 [大山登山] ～大山に登るぞ～

a 実践の概要

結団式では、昨年の大山登山の様子について思い出を発表したり、大山登山の写真や「大山に登るぞ」のポスターを見たりして、大山登山への意欲を持たせた。

朝の活動の時に、持久力をつけるために毎日のように1500m走を行った。このことは、体力をつけ、足腰を鍛えることにつながった。事前に久松山登山を実施し、登山に対する心構えを持たせるとともに、生徒一人ひとりの登山の実態把握を行った。大山登山が未経験の1年生だけでなく、2・3年生にも自分のペース配分を考え、自分の目標を意識しながら登山をするよい経験となった。登る時より、下りる時に気をつけないといけない生徒が多いことが確認できた。これをもとに生徒の希望や保護者の希望調査を含め、登山班を編成した。また、学校では築山や階段で登山練習をした。築山での練習の時、登れない友達の様子を心配して待つ生徒の姿も見られ、ほのぼのとしたものを感じた。

b 展開の様子

表-11 大山登山における生徒の様子と個々の生徒への支援の様子

自力で頂上をめざすグループ、個別の配慮が必要だができるだけ自力で頂上をめざすグループ、教師とマン・ツー・マンで登るグループの3つの登山班を編成し、頂上をめざし3時間のゆっくりしたペースで登山を開始した。

「頂上まで登る」という目標をたて、登山

生徒	Y 男	H 子	S 子
段階	自我の拡大・充実	自制心の芽ばえ	自制心の形成
目標	頂上をめざしてゆっくりと登る。	頂上をめざしてゴーゴー、キーキー声を絶対出さない。	頂上をめざして、同じペースで止まらずに登る。
支援	「みんなと頂上まで」と声かけを続けた。段差の大きい所だけ手を引いた。「ここがいいよ」と足場を示すとそこに足をかけて一人で登った。	「今年こそ頂上に立とうね」とか、8合目の時は「去年よりがんばれそうだよ」など励ましの声かけを続けた。	「がんばれ」「10数えるだけ上がってごらん」等、声かけをすると数歩進んだ。声かけを繰り返した。
様子	疲れたら黙ってじっと立ちすくみ、しばらくするとまた進み、マイペースで頂上まで登った。	家族に「大山の頂上に登ったのよ」と何回も言うほど喜びはひとしおだった。	少し歩いては立ち止まり、また歩き出すという動きで頂上まで登った。昨年よりは楽に歩いていた。

を楽しみにしていた生徒が多かった。大山登山に対する生徒の様子と個々の生徒への支援について表-11に各段階の代表的な生徒3名を載せる。

c 実践を終えて

好天に恵まれ、ほとんどの生徒が大山頂上に登ることができた。本年度は、大山登山にゆっくり時間をかけたくて、日程を2泊3日にし、2日目を大山登山とした。このことにより休憩を取りながら生徒のペースで登ることができた。一人ひとりの生徒が自分なりに頂上に登りたいという思いを暖めており、個に応じた支援により励まされて目標を達成することができたと考える。

(加藤)



大山頂上

⑤ 学習発表会

〈単元設定の理由〉

○中学部は、創作劇「オズの魔法使い」と「太鼓・傘踊り」の二つの発表を行う。生徒が楽しんで主体的に取り組めるように、既成の物語やリズムを覚え込むのではなく、表現の仕方に生徒の個性や特徴や思いを効果的に生かし、自分たちが作り上げる学習発表会という意識を持たせ、展開していきたい。生徒にとっては、自分たちが積み上げた力や練習の成果を保護者や地域の方等たくさんの人に見てもらおう期待感・緊張感・喜びがあり、それを支えに、意欲を持って練習や準備に取り組むことができる。また大道具・小道具・衣装作りを通して、製作技能の向上や自分たちが作った物を生かし、使う喜びや満足感が期待できる。1学期の学級を軸にした宿泊・校外学習から、2学期の縦割班に分かれての運動会・大山宿泊学習と続いた。本単元ではパートごとのグループ練習と合同練習を折りまぜながら、一致団結して発表会に向かうことで、学部としてのまとまりや友だちに対する意識が深まることも期待できる。このように、私たちがめざす「自分なりのめあてを持って、自らの活動を楽しむ子」を育てるのに適した題材が多く含まれた単元である。

○生徒は音楽の時間やリズム運動は好きである。しかし、H子やN男のように、人前で楽しんで発表できる生徒もあれば、繰り返し練習することで自信が持てるよになるW男や人前での発表が苦手で、時にはパニックを起こすK男とさまざまである。一方、創作に関しては、せりふや動作を決められることで安心して取り組める生徒もあれば、G男のように、せりふを言うのは苦手でも、脚本や効果音づくりには意欲的な生徒もいる。また、和太鼓に関しては、1年生の女子2名を除いて、全員が叩いた経験を持ち、リズムを正しく取ることは苦手でも、自分なりに楽しんで叩くことができる。ほとんどの生徒が、学習発表会を楽しみにしており、結団式では「いい発表会にしたい」、「お客さんに喜んでもらいたい」、「上手になってほめてもらいたい」などの意見が出て、意欲が感じられた。集団参加の面では、集団から離れがちな生徒や不安定になる生徒があり、個別の配慮が必要である。

○指導にあたっては、生徒の思いを引き出すために、1人ずつの意見を発表させたり、アンケートを準備したり、グループで相談する時間をもうけたり、選択肢を用意したりと、指導者は多様な方法を取って、生徒の思いに柔軟な構えで臨み、生徒を主体とした学習にしていきたい。生活単元学習の時間に限らず、体育や音楽の時間にも太鼓・傘踊り・歌・リズムの練習計画を組み、学習発表会に向かって学部の学習や生徒たちの気持ちや意識が自然に大きく流れていくようにしたい。全体練習、パート練習、道具の製作などの取り組みは自分の役割に責任を持つという自覚を持たせ、できたという充実感を味わわせたい。

また、学習の予定表を掲示することで見通しを持たせ、生徒が意欲的に自分の力で表現しようとする気持ちを大切にしていきたい。

実践事例「創作に関して～脚本と太鼓のリズム～」

a 実践の概要

中学部の劇は、過去3年間生活の中から題材を取りあげている。昨年の例で言えば、学年ごとに校外学習の様子を劇化し、オムニバス形式で一つの劇にまとめ上げるという形式を取った。今年は、楽しく演じさせたいという思いから「お話を基にした劇にしよう」と指導者が投げかけ、中学生らしいもの、皆で協力してできるものを条件に生徒たちが『オズの魔法使い』を選んだ。大筋は原作を生かしながらも、配役やせりふや動きはすべて生徒の話し合いで決定していった。一方、太鼓は一昨年までは『えのめ』という既成のリズムを取りあげ、できるだけ本物に近づくことをねらっていたが、昨年からは生徒がリズムを作るようになった。いずれも生徒の発想を生かすという意味で時間もかかり、流れもスムーズに行かないことも多いが、自分たちが作るということに楽しさや充実感がある。

b 展開の様子

2年生のG男は大勢の人を前にすると動揺が激しく、昨年の発表会では涙でせりふが言えない状態だった。しかし、裏方の仕事は好きで、自分で小道具を工夫することができた。今年は効果音や衣装の部分でも生徒の発想を生かすように努め、G男のアイデアも多く採用された。かかし役のG男は自分を「ぼーとかかし」と決め、「ぼくはぼーとかかしです。わらの脳みそはあるけど使い方はわかりません。どうしたらわかるかなあ」等の4つの台詞も自分で考えた。自分の言葉だから、したがって覚えるのも早く、感情もこもったものになった。これはG男に限らずどの生徒にも言えることである。



効果音づくり

当日の朝、魔女との闘いの場面で使いたいからと、新聞紙で作った棒を持ってきたG男は、最後まで劇作りへの意欲を見せてくれた。そしてステージでは場を離れることなく落ちついた態度で劇の中に没頭することができた。

c 実践を終えて

生徒一人ひとりの意見や個性が生かされたため、生徒は自分の役に強い愛着を示し、それぞれ楽しんで演じることができた。発表会後のまとめの会では、各自が、自分の目標はほぼ達成できたとの反省を出した。「観てくださっている人に喜んでもらい、自分たちも楽しむ」という全体の目標も達成されたと思う。

(井崎)